

国史跡 恵解山古墳

第 11 次調査 現地説明会資料



恵解山古墳第 11 次調査第 1 区出土の水鳥形埴輪（頭～頸部）
（高さ約 17cm）

平成 22 年 7 月 31 日（土曜日）

財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

調査名 恵解山古墳第 11 次調査、長岡京跡右京第 1001 次調査

推定地 恵解山古墳（東西の造り出し、周濠外堤北部・南部）
長岡京跡右京八条一坊十四・十五町、八条二坊二町

調査期間（現地調査）平成 22 年 6 月 7 日～ 8 月上旬（予定）

調査面積 300m²（予定）

恵解山古墳の概要

恵解山古墳は、古墳時代中期（今から約 1600 年前）に造られた前方後円墳です。古墳の大きさは全長 128 m、後円部の直径 78 m、前方部の幅 76 m で、乙訓地域最大の規模を有しています。古墳の周囲には幅約 25 m の浅い周濠（しゅうごう）があり、周濠を含めた古墳の全長は約 180 m に及びます。古墳は現在竹藪に覆われていますが、築かれた当時は斜面に石が葺かれ、平らなところには埴輪（はにわ）が並べられていました。古墳に葬られた人物の名前は記録に残っていませんが、古墳の大きさなどから少なくとも乙訓全域を支配した実力者の墓であったと考えられます。

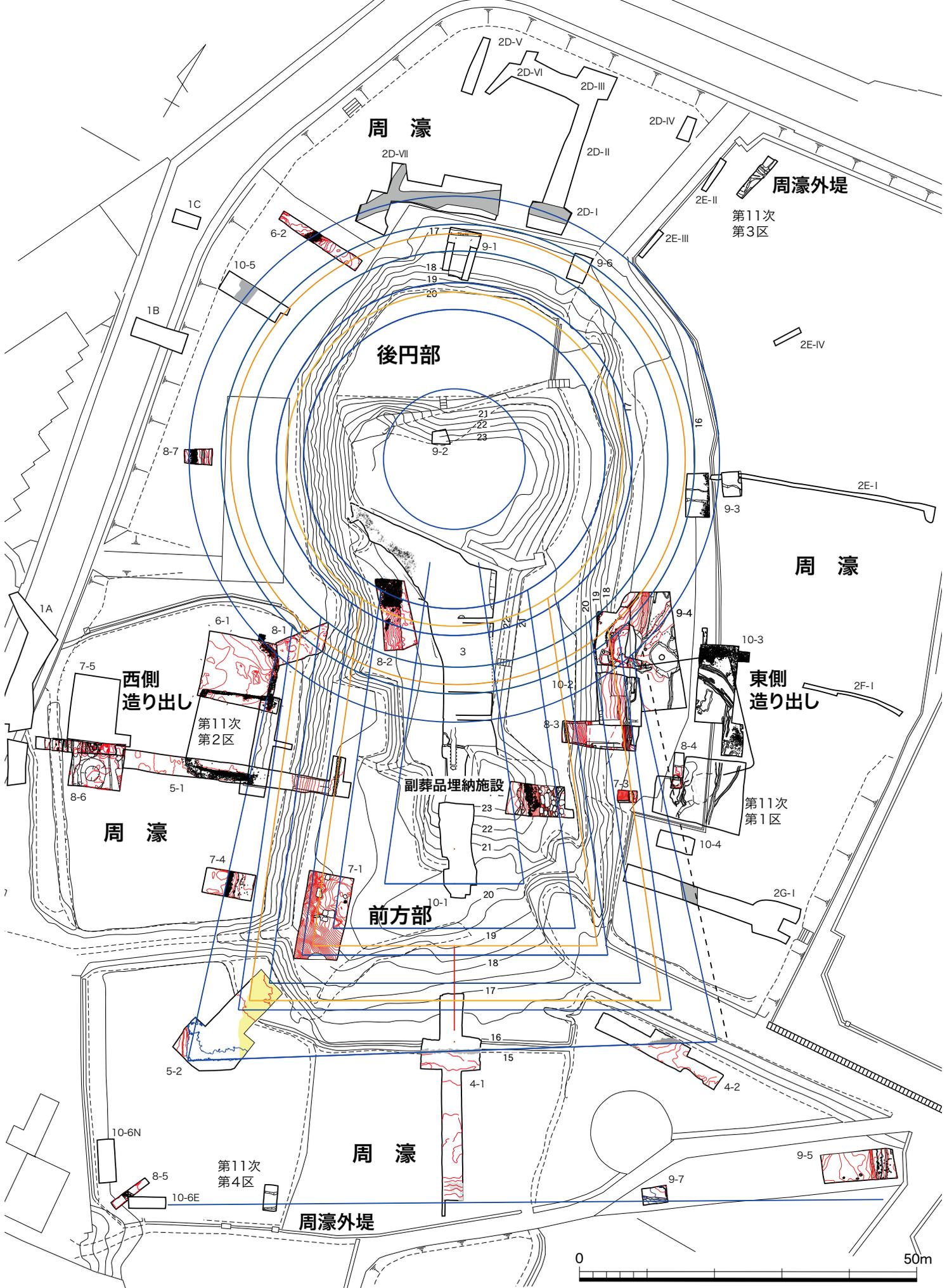
恵解山古墳では、昭和 55 年、墓地の拡張工事の際に前方部の中央から少し後円部側へ寄った所で鉄器が出土し、長岡京市教育委員会が緊急調査を行いました。調査の結果、鉄製の武器（直刀 146 点、鉄剣 11 点、短剣 52 点、短刀 1 点、刀子 10 点、鉄鏃 47 点）など総数約 700 点を納めた副葬品埋納施設が発見されました。古墳からこのように多量の鉄製武器が出土した例は京都府内にはなく、全国的に見ても非常に珍しく貴重であることから、恵解山古墳は昭和 56 年 10 月国史跡に指定され、鉄製武器などの出土品は平成 11 年に府指定文化財に指定されました。

現在、長岡京市では郷土の貴重な遺産である恵解山古墳を後世に伝え、まちづくりに活用するため古墳の保存整備が計画されています。当センターが行った復元整備のための発掘調査では、古墳の形や造り出しなど恵解山古墳の築造時の姿が明らかになってきました。

調査区の設定

今回の第 11 次調査では、東側造り出しの南辺を確認するための調査区（第 1 区）、西側造り出しの接続状況を検討するための調査区（第 2 区）、そして、後円部北側の周濠外堤（第 3 区）と前方部南側の周濠外堤（第 4 区）で調査を行っています。

とくに、東西の造り出しに設定した第 1 区と第 2 区では大きな成果を納めることができました。



恵解山古墳の墳丘復元図と調査区の配置

第1区

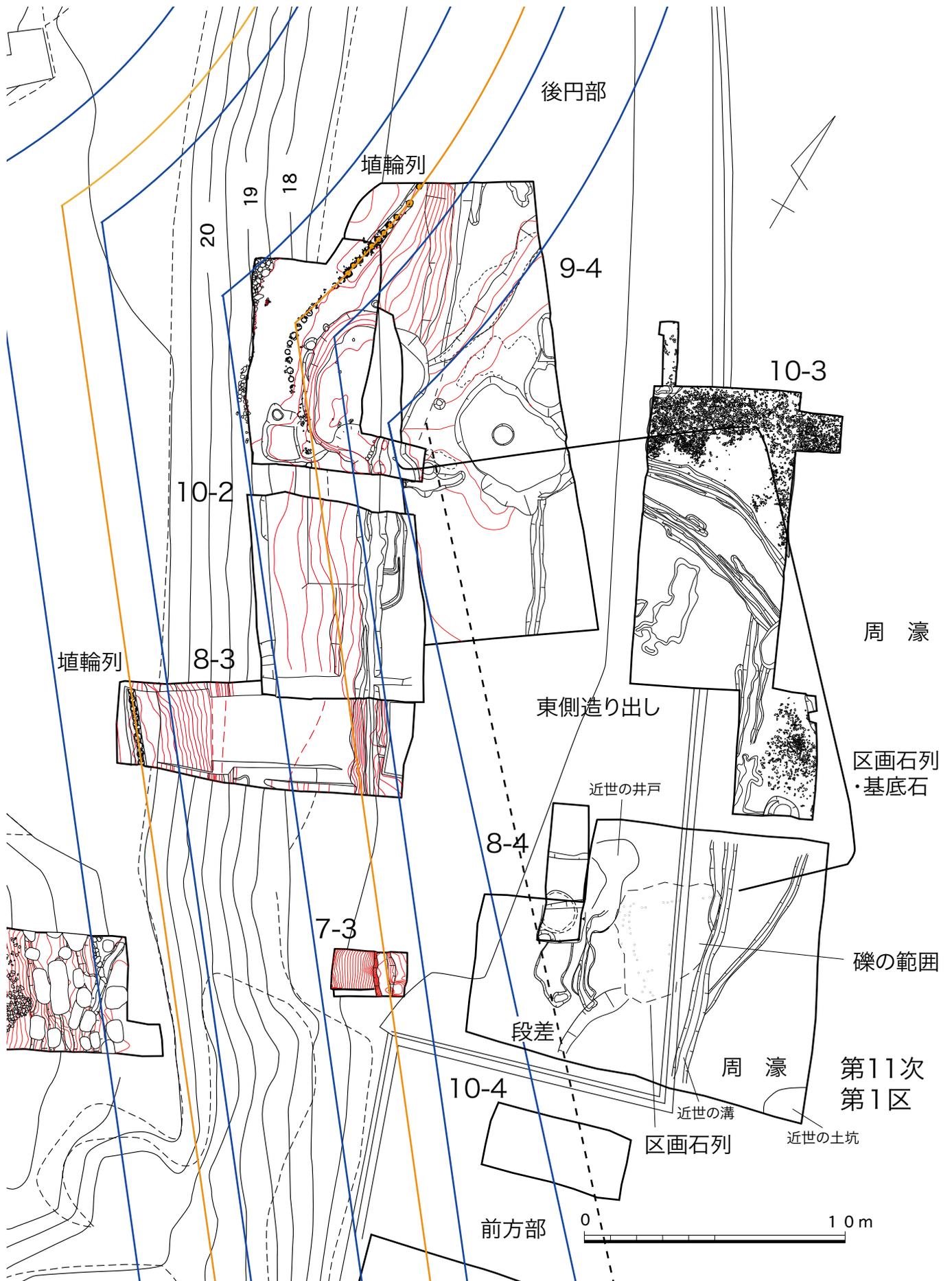
第1区では、東側造り出し南辺の基底石と周辺に施された区画石列を伴う礫敷などを確認しました。南辺の基底石列は東西約4m分を検出しましたが、本来、さらに西側(前方部側)・東側(周濠側)へ続いていたものが中世や近世期の耕作によって削平されたと考えられます。今回、造り出しの南辺を確認したことで、東側造り出しは南北幅約18m、周濠への張り出しが約14mと、西側造り出しより一回り大きいことが確かめられました。

石列は南北約4.5mのものを1条検出しました。この石列は調査区の北西隅で南辺の基底石に接続しています。石列接続部の標高は15.1mで、第10次調査第3区で確認された東西方向の区画石列(周濠と造り出しの境界)の西端より約20cm高い位置にあります。南北方向の石列は、高さの差や石の配置状況、石列の前方部側にも僅かに平坦な礫が施されていることから、前方部の基底石列ではなく、造り出し接続部に設けられた礫敷を区画するためのものと考えられます。また、南北方向の区画石列の中央部東側では水鳥形埴輪の頭部が出土しています。

前方部の裾については本調査区でも基底石が確認されていません。しかし、調査区南辺の西部において盛土および地山の段差を確認しており、この段差が前方部を反映したものと考えられます。



第1区の全景写真(南東から)



第1区の検出遺構とこれまでの調査区 (1/200)

第2区

西側の造り出しは、くびれ部から約6m離れた位置に設けられ、接続部の幅約12m、周濠への張り出しが約10mを測ります。本調査では、第5・6次調査区の一部を含めて再発掘し接続部の状況を検討しました。調査の結果、西側造り出しの接続部には、第6次調査の谷状を呈する葺石から南北方向の溝状遺構が設けられていたことを確認しました。溝状遺構は幅1m前後を測りますが、その深さは非常に浅いものでした。特筆すべきは、溝状遺構内の北半部において埴輪の基部を4点確認したことです。4点の埴輪基部が溝底部の東端(前方部側)に沿って並び原位置を保つことから、埴輪列は、西側造り出しの上面に設けられた埴輪方形区画の一部と考えられます。今回の調査によって、区画の最も東にある埴輪列が前方部裾より約1m東側に位置すること、埴輪の底部を完全に埋没させた場合この部分の高さは15.7mとなり、西側造り出しは上面と周濠底の比高差が約0.6mの低い形態であることが分かりました。

また、西側造り出しの構築方法についても、1.地山を大まかに掘削、2.前方部裾部の盛土、3.西側造り出しを異なった土で盛る、4.接続部に溝状遺構を掘削、5.造り出し上面と溝状遺構内に埴輪列を配置し埴輪列を埋め戻す、北側の接続部に谷状の葺石を設ける、という手順を復元することができます。

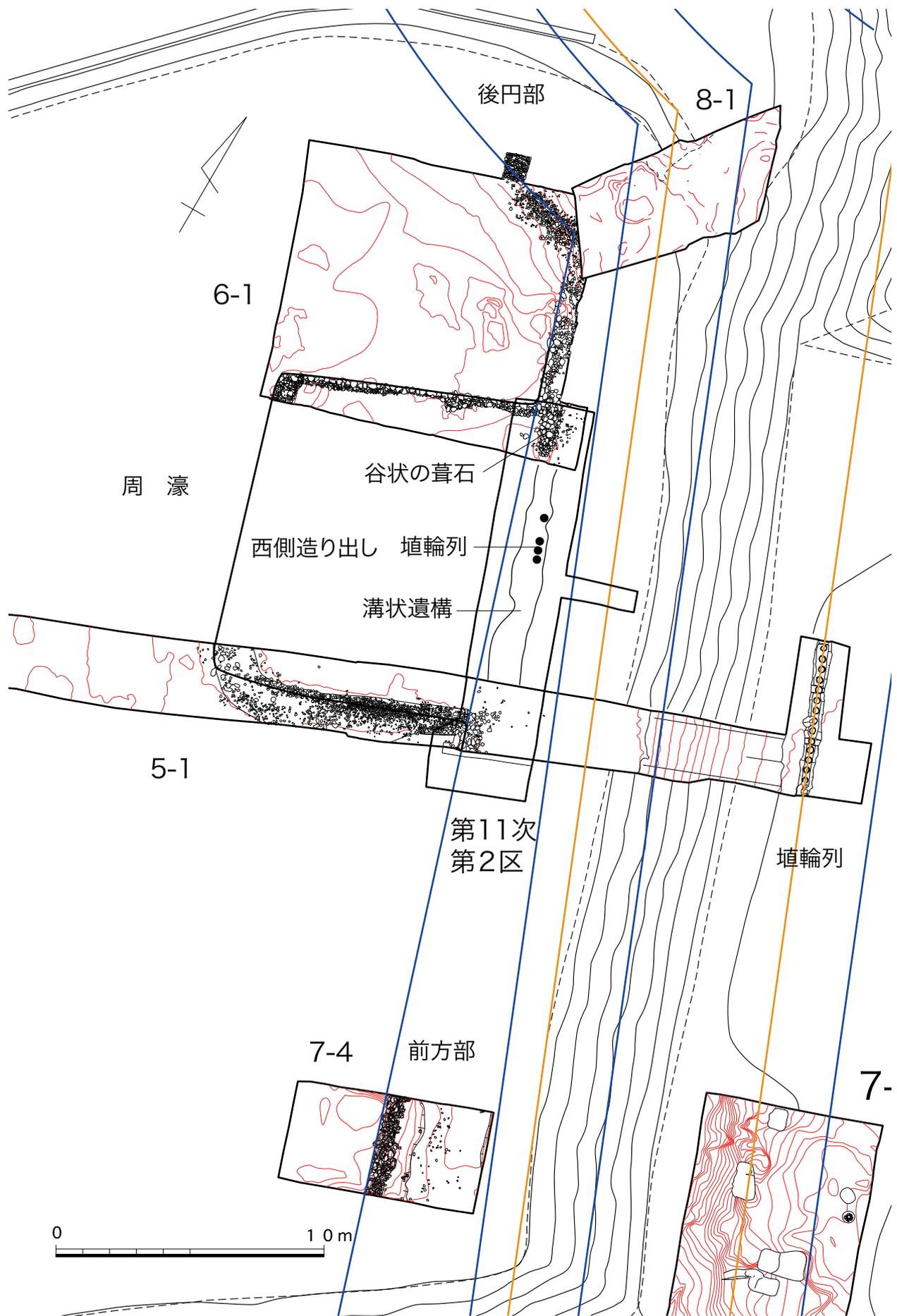
東西の造り出し規模や形態、構築方法など、今回の調査では造り出しに関する様々な情報を得ることができました。こうした成果は、恵解山古墳の復元整備だけでなく、畿内中枢部の古墳や他地域の首長墓と比較することで、造り出しの形態変化や意味を検討するための重要な資料となります。



第2区の全景写真(北から)



溝状遺構内の埴輪出土状況(南から)



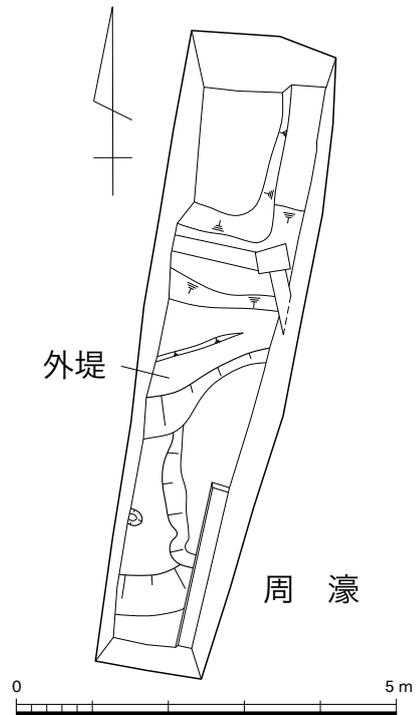
第2区の検出遺構とこれまでの調査区 (1/200)

第3区

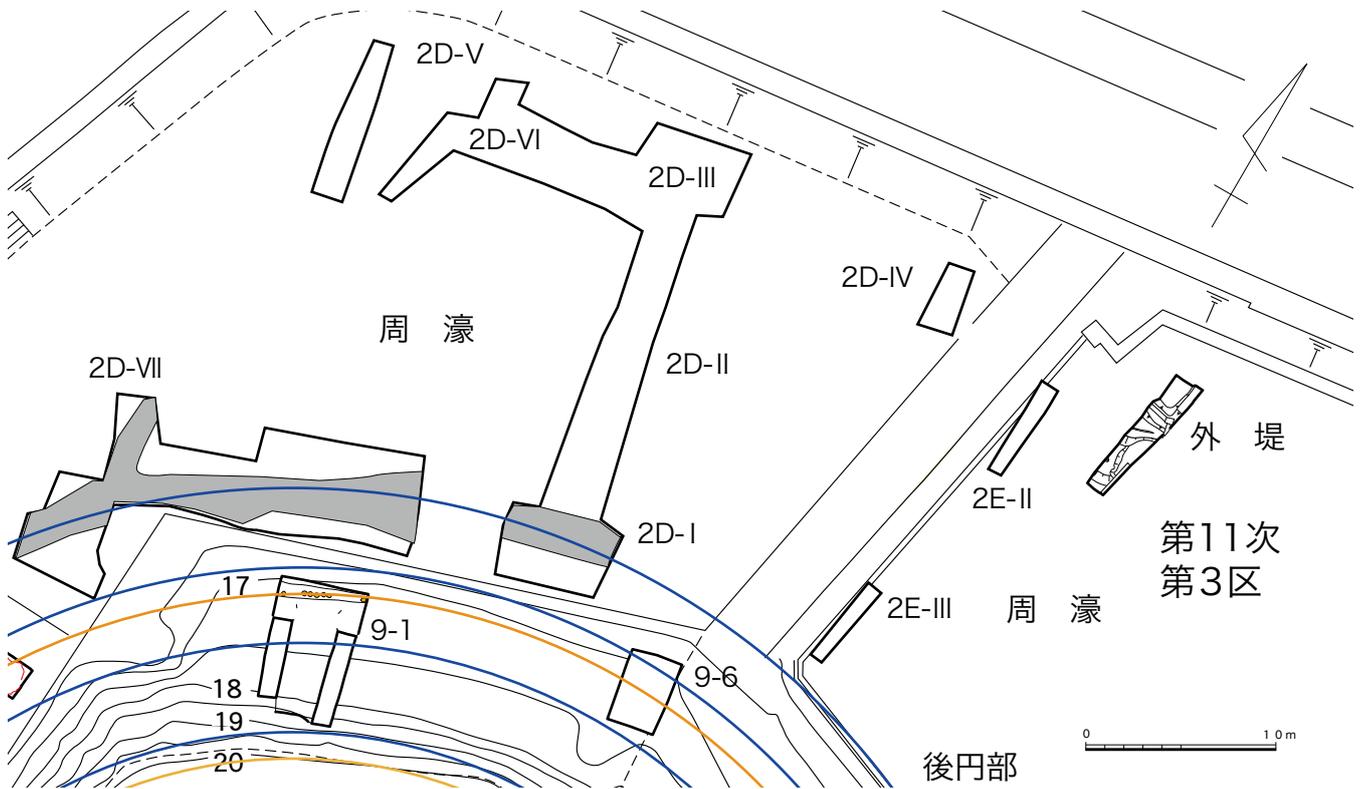
第3区は幅1.5mまでの狭小な調査区で、排水ポンプやグラウンド透水管の設置に伴う攪乱を受けていましたが、後円部周濠の北側外堤と周濠埋土を確認することができました。周濠外堤の最高所は調査区のほぼ中央部で標高15.15mを測ります。周濠外堤はほぼ東西を指向し、後円部の円弧を反映した方向に一致しません。本調査区における周濠底部の高さは14.8mで、第1区に比べて0.2m高い位置にあります。底部にはこれまでの調査と同様に褐色系の粘質土が堆積しており、埋土からは埴輪片とともに長岡京期の遺物、さらに上層では中近世の遺物が出土しています。



第3区の全景写真(北から)



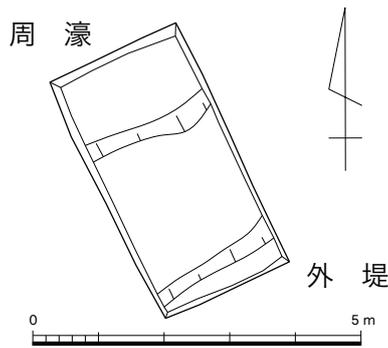
検出遺構図(1/100)



第3区の検出遺構とこれまでの調査区(1/400)

第4区

第4区では、前方部南側の周濠外堤斜面と周濠埋土を確認しました。周濠底部には褐色系の粘質土が堆積しており、第3区と同様に埴輪片の他、長岡京期、中近世の遺物が出土しています。



検出遺構図 (1/100)



第4区の全景写真 (南西から)

出土遺物

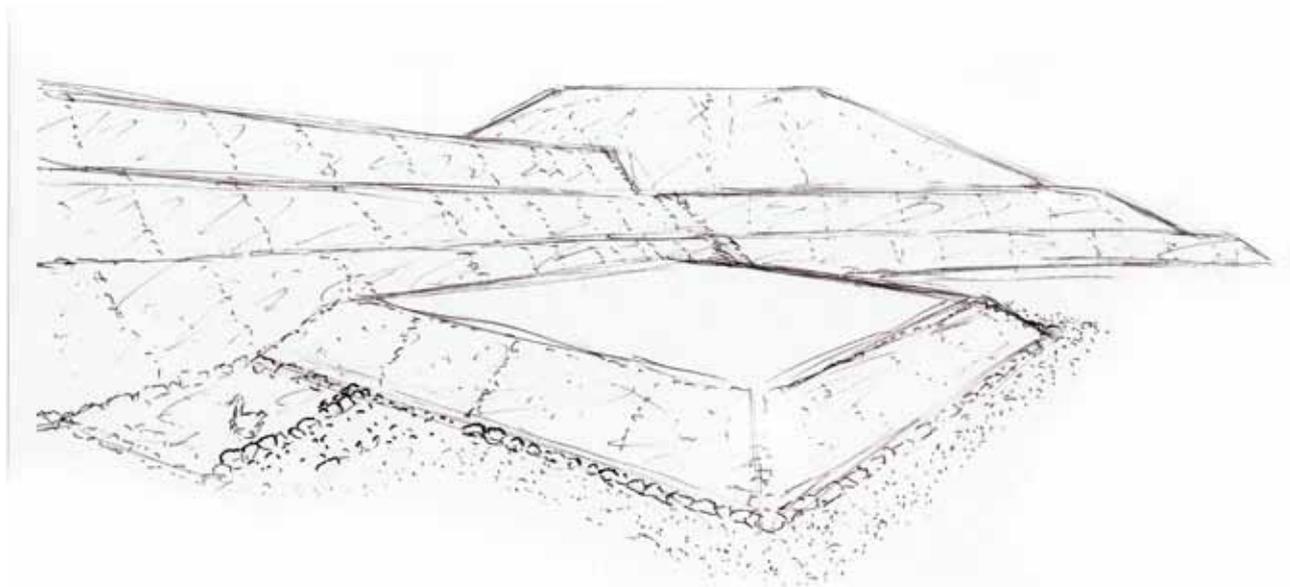
恵解山古墳に関連する遺物は、第1区の区画石列を伴う礫敷部分で最も多くが出土しました。出土遺物には、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪の他、形象埴輪で前述の水鳥形、蓋形、壺形、家形埴輪などがあります。

水鳥形埴輪は、恵解山古墳において初めての出土例です。下左図の頭部から頸部の他に、尾羽・足・翼の破片も出土しています。頭部には線刻で平らな嘴と白目が、黒目は刺突で表現されています。出土地点は第1区南北方向の区画石列中央部の東側であり、東側造り出し接続部付近の石列を伴う礫敷を州浜に見立てて配されたと考えられます。

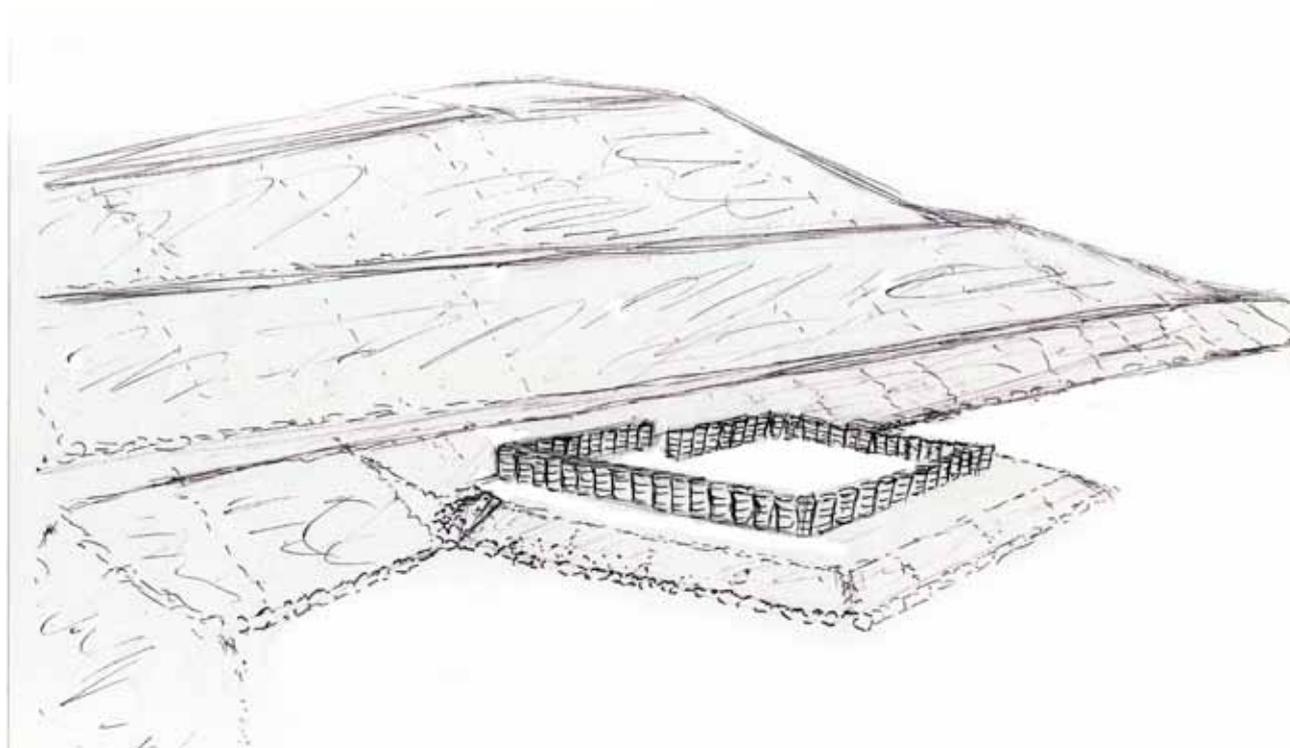


第1区出土の水鳥形埴輪

東側造り出し想像図 (前方部・南東から)



西側造り出し想像図 (後円部・北西から)



財団法人長岡京市埋蔵文化財センター ホームページ開設のお知らせ

当センターでは平成22年4月より、ホームページを開設いたしました。ホームページでは、みなさんに当センターが実施する各種イベントや発掘調査成果などの情報を発信していますので、是非ご覧ください。

ホームページのアドレス <http://nagaokakyo-maibun.or.jp>